

シリーズ『家庭と学力の関係を考える』三部作

第一部

子どもの成績が全く伸びなくなる 親の7つの対応

—どれにも当てハマっていなければ大丈夫!—
ハイパーラーニング名取教室 塾長 工藤 豪 著

小・中・高指導 あなたの本気にこたえる塾



はじめに

勉強は親がやるわけではない

わが子が進んで勉強するようになってほしい。成績が上がって、希望する学校に行ってもらいたい。

このように願っている親御さんは多いです。しかし、**勉強をするのは子どもであって自分ではありません**。だから、普段勉強をあまりやらないわが子を見ると、とてももどかしい気持ちになります。

子どもがいつまでも遊んでいると、言いたくないのについ「勉強しなさいっ！」と声を張り上げてしまいます。そして子どもから「今ちょうどやろうと思っていたのに」「今日は〇時からやる予定だったのに」と返されると、ある方は「ああ、余計なことを言ってしまった」と自分を責め、またある方は「いつもやるやる言ってるけど、さっぱりじゃない！」とやり返します。

どうして分かってくれないのかしら！

一方、「勉強しなさい」ということを言わずに、子どもがやる気になるのを忍耐強く待つという方もおります。子どもが自分でやる気になってから勉強を始めなければ、いくらやっても身にならないという考え方です。

しかし、子どもが行動を起こすのを待っている間というのは不安で一杯です。「このままでは周りにおいていかれるのではないか…」「そろそろ本気になってくれないと受験に間に合わないのではないか…」不安やイライラは募る一方です。

本人に向かって「やらないならやらなくて結構よ。あなたの人生なんだから。」と口では言うものの、わが子の将来を案じるとそういうわけにもいきません。

じゃあ突き放した言い方を改め、穏やかに諭すように語りかけてみるかと考えます。でももし、それでも子どもが動かなかつたら…。私は「もうどうしたらいいんでしょうか」とため息混じりに相談を受けることがよくあります。

ここで一度フォローしておきますね。**「お母さんたちは悪くありません！」**

全てはわが子の将来を心配しての行動です。怒ったり、ほめたり、なだめたり、励ましたり、全ては子どものためを思っていることです。

「子どものためを思って」が裏目に

私は今まで約十数年に渡って、実に数え切れないほどのさまざまな小学生、中学生、高校生の親子や家族関係を見てまいりました。進路相談はもとより、勉強に関する悩み相談というのも数多く受けました。

だから私には親の気持ちも子の気持ちも良く分かります。親は、子どもが成長過程の中で、勉強を含めていろいろなことに真剣に取り組んでくれれば良いと考えています。

そのためにときどき口酸っぱくなることもあります。今一瞬憎まれたって構わない。将来きっと分かってくれるだろう。そういう思いが数々の行動つながっているんです。

できる子とできない子の違い

しかし私は一方で、面談を重ねるうちに、親の内面ではなく外面部分、つまり子に対する言葉や表情、接し方といったものには恐ろしいパワーがあるんだなと思うようになりました。

成績が上がる生徒の親と、成績が上がらない生徒の親には、子に対する接し方に違いがあることに気付いたのです。特に成績がなかなか上がっていかない生徒の親御さんには、考え方や言動にいくつかの共通のパターンがあることが長い経験の中で分かってきました。

親のみなさんは、心の中で子どものことを真剣に考えています。並ならぬ愛情を持って接していらっしゃる。

しかしそれを表に出すときに、特に勉強面で、やって欲しさから言い方や対応を間違える場合があります。そして誤った対応は、子どもを傷つけ、子どもの能力を閉ざしてしまいます。

「第一部 子どもの成績が全く伸びなくなる、親の7つの対応」では、成績が上がらない子の親御さんに共通する、言動・行動パターンを書きました。私が長い指導経験の中で実際に肌身に感じた内容を、具体例をもとにお話しします。

「**第二部 成績が沈滞する子どもの6つのサイン**」は、親ではなく、子がメインです。**それまで勉強面で困ったことのなかった生徒が、突然、または徐々に成績不振に陥る**ことがあります。どうしてだろうと原因を追究しているうちに、こちらもある一定の法則が見えてきました。

指導現場の中でこれらのサインが現れると、私たちは「これはマズイ兆候だな」「この性格が災いしているな」と感じます。もちろん私たちは、すぐにその場で指導しますが、ご家庭でもこの危険の予兆を知っておいていただければ、ご指導の上で参考になると思います。

三部作の最後を飾る「**第三部 子どもを動かす 9つの方法**」は、今までの正反対。子どもにプラス行動をとってもらうための、親や周囲ができることやすべきことを9つにまとめました。

子どもは対応ひとつでガラッと変わる

私たちは、**なかなかアクションを起こさない生徒をどうやって自ら動くようにさせるか**、日々そのことを考えています。やることの重要性を説いたりほめたり怒ったり、生徒を動かすには何でもやってきました。その結果、「ああ、あれが効いたんだな」と、**魔法の言葉ともいえるもの**をいくつか獲得しました。

結果、今では当教室の多くの生徒が主体的に勉強に取り組むようになっていました。第三部では、私たちが普段よく行っている「やらない人間をやる人間に変える方法」を余すところなくお伝えします。ご家庭の教育においてもきっと役に立つと思います。

本内容は、他の書物や文献に書いてあることをまとめたものではなく、全て実際の生徒指導において私が経験、体験した内容です。書いた本人は極めて実践的な内容だと思っておりますが、お読みになった方の中には「それは違うよ」という部分もあると思います。そういうときは、どうぞ軽く読み飛ばしてくださいね。では、さっそく本題へ入りましょう！

第一部 子どもの成績が全く伸びなくなる、親の7つの対応

やっではいけない行動その1

1. 圧力・説得型

「なんでやらないの？」

志望校を確認する中3の三者面談で、お母さんは言いました。

「自分の人生なのよ！お母さんの人生じゃない。」

女子生徒は、うつむいたまま黙っていました。

「高校行けなくて良いの？はたらく？」

中2春から塾に来たその生徒は、全科目点数が低く、校内試験の成績は5教科で100点台でした。当初、勉強に対して、全く自信が持てない生徒でした。

「できた！」が自信に

こういう生徒をお預かりした場合、私たちはまず1教科、できれば2教科を手っ取り早く上げます。期末試験は範囲が狭いので、教科を絞ってガンガン詰め込めば一時的に得点を上げることは可能です。

そうなると大概の生徒は、得点が上がった自分にびっくりし、やればできるんじゃないかと自信を持ち始めます。次は他の科目もがんばるぞと意欲的になり、好循環が生まれま
す。

この生徒も同じステップを歩み、試験は300点台を取るまでになりました。

ほめてますか？

でも、(こういうことはあまり言いたくないのですが) この生徒はこの状態をなんとかキープするのでいっぱいでした。1日2時間も勉強すればヘトヘトになる子だったのです。

そういう子に対して、「行きたいんだったらもっとやりなさい」は逆効果です。

私はその生徒に、今まで点数が倍以上に上がったことをほめられたことがあるか尋ねました。彼女は「**いや、一度も。ウチはあんまりホメないですよー。**」と自嘲の笑顔を浮かべて答えました。

子どもが勉強をやるように仕向けるには、まずほめることが大事です。 得点が上がらなくても、努力が見えたならそこをまずほめるべきです。この生徒は得点が100点台から300点台へ上がりました。ほめる材料にはこと欠かないはずなのに、どうしてほめなかったんだろう。

アメとムチ

がんばりを一度も認めることなく、「もっとがんばりなさい」「どうしてもっとやらないの」はナンです。**ムチばかりでは、やる気が上がってこない**のは当然です。

面談は続きます。

「あと3ヶ月しかないのよ！もっとがんばらないと！今のままだったらダメなの分かるわよね。自分のことなのに信じられない！」

生徒は寂しげな面持ちで目を伏せていました。

「あなたはやればできるんだから！これまでもそうだったじゃない！」

この瞬間、生徒の目から涙がこぼれました。

圧力に耐えられなくなったからなのか、それとも、自分の過去の努力を初めて認めてくれたからなのか。

説得されていい気持ちになる人はいない

望む行動を取ってほしくて、そうなるように説得にかかるというはやめた方がいいです。

「じゃあ、放っておけと言うの？」と思われるかもしれませんが、放っておくのももちろんいけません。

まずはほめること。いや、**ほめるというより、認める**といった方がいいのでしょうか。がんばった痕跡や認めることのできる部分は必ずどこかにあるはずですよ。

望む行動の話はそのあとにします。**説得するのではなく期待を寄せるように話す**のがポイント。

「なんでやらないの！やりなさい！」ではなく、「あなたはここまで随分がんばった（まず承認）。このあともしも社会が上がったら、もうこれはすごいことになっちゃうね！」と遠くを見つめながら、多少目をウルわせながら語る。こうすれば子どもはさらに自分を認めてほしくてがんばるようになります。

やってはいけない行動その2

2. 困惑・不安型

「先生…、ウチの子、このままで大丈夫でしょうか…。全然やる気がないんです…。」
そのお母さんは眉間にしわを寄せて、落ち着かない様子で言いました。

「お陰さまで良くなってきてはいるんですけど、なんかねえ…。まだテレビ見てる時間があるんです。」

と、子どもの方を不安げに見つめます。子どもは愛想笑いを浮かべ困惑したような顔つきでただ黙っていました。

「私の知り合いが、今回の受験は〇〇と行っていましたがどうなのでしょう。」
受験が近づいてくると、いろいろな人がいろいろなことを言います。

「〇〇ちゃんは推薦で行けるみたいよね。うちもそれで行けたらいいんだけど。」
受験生の年末年始は、周囲が一気にあわただしくなります。お母さんはそんな周りの状況が気になって仕方がない様子。子どもの顔にも不安の色が浮かんでいます。

不安で不安でたまらない

私は進路の具体的な可能性を示したあと、その生徒の最近のがんばりや結果が出てきている点について説明しました。

「この時期、全ての中学生が一生懸命に受験勉強に励んでいます。そんな中、△△さんは偏差値を伸ばしているのです。やっていなかったら、いい結果は絶対に出ません。今は、子どものがんばりを信じて励ましてやってください。」

「ええ、でも…不安で、不安で…。」
お母さんはいまにも胸が張り裂けそうといった様子でした。

ノッていけない

次の日一、塾の授業で、その生徒は数学の難しい問題を当てました。

「おお、良くできたね！これをノーヒントでビシッと当てるとは！やっぱりすごいね、アンタは！」昨日の不安顔を見ていた私は、ややオーバーにほめたたえました。

しかし、その生徒は軽く首を横に振り、「たまたまです、ダメ、私…」との返事。謙遜とかそういうものではなく、**全く自信がない**様子でした。

この瞬間、私は「**この生徒の『カベ』はここだな。**」と思いました。そう言えば、半年前の入会した時からそうだった。**成績を短期間でグングン伸ばす人というのは、自分に自信が持てる人だ。**自分への自信が推進力になって、追い風に乗っているかのごとく急速に力をつける。

しかし自分に自信のない人は、一度レベルアップしても、「自分はそんなレベルに達していない」と考え、**追い風に乗らない。むしろ風に逆らって元に戻ろうとさえする。**

こうなると勉強以前の問題です。勉強に限らず、今後の人生に関わる重大問題です。

「あなたには十分力があるんだから、自信を持って先へ進みなさい。」と声をかけるも、もともとの思考パターンや性格がそうであるので、なかなか改善するのは難しいです。

面談を重ねて気付いたのですが、そういう子は、親が心配症というか、子どもの実力に不安を抱いているケースが非常に多いことが分かりました。**不安は伝染します。**子どものためを思うなら、子どもの前では不安な態度を見せないようにすることが大切です。

やってはいけない行動その3

3. 長時間激怒型

「勉強しなさい！何時まで寝ているの！」

「何で言われないと分からないの！」

「いつも言ってるじゃない！何度言えば分かるの！」

これは想像で書いています。面談でこのようなことが起こるわけではありません。ただ生徒と話していると、よく怒られる、親の怒りが爆発するという話をときどき聞きます。

でも、これも子どものためを思って言っているのだと思います。いつも言いたいけどガマン、言いたいけどガマンを繰り返し、溜まりに溜まったものが吐き出されたのでしょう。

毒を盛る

ただ、子どもがよっぽど悪いことをしたならともかく、勉強しないということで怒るといのはちょっとどうなのかなと思います。

怒りには「毒」が含まれているそうです。エルマ・ゲイツという心理学者の実験で、人間の普通の息と怒ったときの息を凍らせてネズミに注射したところ、怒ったときの息を注射されたネズミは数分で死んでしまったということです。

子どものためを思って怒ったつもりが、実は毒を盛っていた、なんてことは誰しも避けたいでしょう。では、いくら言ってもやらない子にはどうすればいいのでしょうか。

人格否定はダメ

まず、やむを得ず怒らなければならない状況なら、その対象行為のみを短時間で怒りましょう。良くないのは、長時間にわたって怒り続け、終いには「何でお前は〇〇なんだ！」と人格否定にまで入ってしまうこと。こうなるともう焦点がスッ飛んでしまっています。

遊んでいる子に勉強の話を振るなら、「やりなさい」と命令するのではなく、「6時だ、さあやるか！」と、短くかけ声をかけるように言うのが良いと思います。そして、親も本を読むなり、家事を始めるなり、家庭全体で環境を整えることが大事です。

やってはいけない行動その4

4. 不信・疑念型

「ごはん食べ終わった後まっすぐ二階に上がるんですけど…、ちゃんとやっているかは分かりません。」

お母さんはそう言ったあと、子どもの顔を確認めます。

「やってるよ！」

子どもは弁解、証明に走ります。親はさらにアリバイ崩しに出ます。

「この前、部屋に入ったら寝てたじゃない。」

「それは…」

「ほらね。いつもこんな感じなんです。」

その生徒は、苦虫をかみつぶした表情で一瞬何か言いたげでしたが口をつぐみました。

この生徒の宿題の状況を見ると、確かにムラがありました。本人の言うように「やってる」ときもあれば、お母さんの言うように「寝ていた」ときもあるようです。

正直、私は、これはどっちでもいいんじゃないかと思っています。こういうことは疑ったらキリがありません。毎日つきっきりでそばにいることはできませんし。

親が子に不信や疑念を抱くと、子はますます証拠づくりに勤しむようになります。どうやったらバレないかということを勉強そっちのけで考えるようになります。これでは意味がありません。

結果を見れば分かる

だいたい、結果が出ていなければ、いくら本人が「やった」と言っても通じません。**実際に机に向かっていても、それはやっていないことと同じ**です。意味のない勉強をしているのであれば、それを早めに正し、本物の勉強とはどういうことか教えてやらないといけません。

逆に、成績が良くなっていれば、それは「やった」からそうなったのだろうし、仮にサボっていたとしても「『やった』から結果につながったんだね」と、**本人を信じてほめてあげていい**と思います。

偽のヒーロー

私は授業で、明らかにマグレ当たりだろうと思われるものに対して、「マグレだな」とは言いません。むしろ「いや〜、良くできたね。家で良く復習しているんだろうね。みんな、見習えよ。」とわざとヒーローに仕立て上げます。本人は、参ったなという感じで苦笑いをしていますが、その後急激に集中して勉強するようになります。今度は本当の力で当ててやろうという意識が働いているのだと思います。

やってはいけない行動その5

5. 世話人・代理人型

入会時の初回面談にて一

私「苦手科目はありますか？」

子「…」

親「え〜っと、国語がそうよね？国語はねえ、前からだもんねー。」

私「数学はどう？」

子「…」

親「数学はねえ、そんなに苦手というわけではないんですけど…、文章題は苦手だよね。」

このように、親が子どもの代理人になって質問に受け答えするケースは少なくありません。このとき、子どもは無表情・無気力だったり、ただ愛想笑いを浮かべているだけだったりします。**自分の代わりになんでも親が答えてくれる**ので、面談の間、子どもは話す必要がないのです。

頭を使わなくなる

受け答えをしなくていいということは、**頭を働かせる必要がない**ということです。これは一番恐ろしいことだと私は思います。

成績が伸びない人というのは、一言でいえば、頭を全く働かせようとしない人です。

この人たちの勉強は、頭をほとんど使うことなく、手の運動に終始します。例えば、漢字や英単語の書き取り、簡単な計算、理科社会のノート写しなどがそうです。

自分の子どもを見て、普段良く勉強をやっているようなのに、どうして結果が出ないのだろうと思ったことはないですか？そういうときはまずこのパターンにハマっています。**子どものためにと、親があらゆる場面でお世話をした結果、自分の脳みそを使うことができなくなってしまった**のだと思います。

自分でできることは自分でやらせるようにしましょう。つい手を貸してあげたくなっても貸さない。全ては子のためです。親は**子の行動を見守るだけ**というのが理想です。

やってはいけない行動その6

6. 批判・否定型

5教科 250点の子が入会后短期間で400点を取りました。人とのコミュニケーションが苦手で、自分自身をなかなかオモテに出さない生徒です。私たちはここぞとばかりにその生徒の肩をぼんぼん叩きながら結果をほめ称えました。

「お母さんは何と言っていた？」

「…英語を…もつとがんばれって…」

その生徒は浮かない顔でボソッと答えました。

「まあ、確かにそれは次の課題だな。でも短期間でこれだけ上がるのはすごいよ。**親もほめてたろう？**」

彼は弱弱しく首を横に振りました。

ネガティブな言葉が心を殺す

私はその日のうちに生徒のお母さんへ電話をかけました。

「〇〇君は、今回がんばりましたよね。家でも相当努力していたでしょう？」

「ええ、やってはいたみたいですけど。まあ、**元がひどい**んで。」

「前のはいいですよ。それにしても数学と社会は一気に抜けだしましたね。」

「**でも、英語が悪い**ですよ…。単語を覚えるのは前から苦手です…」

受話器の向こうから、ため息を吐く音が何度も聞こえてきます。

結局 20 分の会話の中で、お母さんの口からは、わが子の努力を認める言葉は一切なく、**マイナスの言葉しか出てきません**でした。

ほめない、認めないというのは、「1. 圧力・説得型」のところでもお話ししました。しかし今回ののは、それよりもひどいです。

ネガティブ、批判、否定的な言葉ばかりを浴びせかけるのですから、生徒はたまったものじゃないでしょう。いや、**そういう感情はすでに持ちえていないのかも**。

「そういうことばかり言うのはいい加減にしてくれ！」と親に反抗する力を身につける前に、ネガティブな言葉によって精神性を根こそぎ奪われてしまったのかもしれない。

子どもの欠点に目がいてしまう

わが子が欠点のない素晴らしい人間になってほしい。そういう思いが強いので、つい子どもの長所よりも短所に目がいてしまいます。そして良くなった点よりもまだ改善されていない部分が気になってきます。

しかし、そういう考え方を直さないと、子どもは本当の意味で素晴らしい人間にはなれません。マイナス面ばかり言い続けていると、子どもはその言葉を受け入れ、自分を過小評価してしまいます。結果、自分に自信が持てなくなる。一流の人で、自分に自信がない人というのはいません。

否定より肯定

一度ほめてから批判を与える人という人もいます。「今回の数学は良かったね。でも英語がねー。」というパターン。これもあまり良くありません。前半のほめ言葉は、後半のまき餌のように思われてしまいます。

注意を与えるなら、「でも」を「さらに」とか「そして」に変えると良いです。「今回の数学は良かったね。お母さんもうれしいわ。そしてさらに英語も上がったら最高だね。」

その症状はお母さんのせいじゃないよね？

別の生徒の話。中3の4月に塾に入り、その後模擬試験を受けるたびに偏差値を上げ続けていた男子生徒がいました。頭の回転が速く、明朗快活。空気を読んでみんなを笑わせるのが得意な生徒でした。

4月の入会面談のときは初対面だったのであまり気がつかなかったのですが、面談を重ねるうちにこれはおかしいぞと思う部分が出てきました。どうやらその男子生徒はチック症を患っているようなのです。面談中、頻繁に鼻をクンクン鳴らします。

ただこの男子生徒、普段は陽気で明るく、このような仕草は一瞬も見せたことがありません。しかし面談のときは決まって表れます。しかもお母さんとの三者面談のときに限り。

私が成績の話を始めると、お母さんはツンとした表情で言いました。

「この子、バカですから。」

このとき、生徒の例の仕草は激しくなりました。

「アンタ、どうして社会できないの？あんなの覚えるだけじゃない。」

緊張した生徒の様子は、まるでへビににらまれたカエルのようにです。普段の活発な態度は全く陰を潜めていました。チックの症状はさらにひどくなり、激しく咳き込んでいます。

私は見ていられなくなり、母親に向かって言いました。

「〇〇君はバカじゃないですよ。そういうことをあまり言わないでください。」

この生徒は明らかに親に萎縮していました。**普段から批判的なことを言われているのでしょう。**お母さんを前にしたときとそうでないときはまるで別人です。私は、**親の態度は子どもの性格をここまで変えるんだ**ということを知って、大変驚いたのを覚えています。

それは禁句だって！

生徒は、その後も成績を伸ばしましたが、最後、入試レベルの難しい問題を解いているときによく口にした言葉がありました。「**俺はバカだからな。**」

ああ…。君も言ってしまうのか、その言葉を。最後！もうひと伸び！志望校の安定圏内まであとちょっと！ここが踏ん張りどころなのに…。

学力レベルに大差ない二人がいたとして、片方が受かり、片方が受からないことがあります。その差は何だと思えますか？私は、**難しい問題や見たことのない問題に直面したときの、心の持ちよう**だと思えます。

受かる人というのは、「**難しいけど（見たことないけど）、自分にはできるはずだ**」と考えます。過去の成功体験やほめられた経験が自信へとつながっているので、前向きに考えることができるのです。

一方、受からない人は「**これは難しい。俺はバカだから分からないな。自分に解けるはずはない。**」と半分あきらめながら問題に取りかかります。過去の成功経験やほめられた経験が少ない人、または常日頃から否定的なことを言われ続けている人はこの傾向にあります。

同じ学力でも、解けると思いながらやる人と、解けないと思いながらやる人、どちらがチャンスをモノにするのでしょうか。子どものためを思うならネガティブ発言は慎んでください。

やってはいけない行動その7

7. 落胆・投げやり型

説得型や、否定型よりひどいのがこの「投げやり型」です。子どもと関わりを持たず無視に近い態度を取るので、はっきり言って最悪です。私は 1,000 組以上の様々な学年の親子に触れ合ってきましたが、さすがにこのパターンに属するご家庭は滅多にありません。

しかし、これもお母さんが子どものことを思うあまりの行動なのだと分かりました。実際の例を紹介します。

三者面談にてー

「ホント…、どうしようもない…」

私が家庭学習の様子を生徒に尋ねると、お母さんは子どもに軽蔑の眼差しを向けて答えました。生徒は無理に笑顔を作っていました。

「志望校は〇〇でいいんだよね？」

私が生徒に確認を取っている間も、お母さんはブス〜ッとしています。

生徒は、志望校に力なくハイと答えたあと、お母さんの顔色をうかがいます。

「好きにすれば」

お母さんは投げやりに言いました。

生徒は相変わらず無理な笑いを浮かべながら「いいの？」と尋ねます。

「知らない」

お母さんは鉄のような表情で吐き捨てました。

なんてひどい！私は心の中でお母さんの態度に憤りました。可哀想な生徒…。

悲しみを感しない人間

お母さんがお帰りになったあと、私は生徒に言いました。

「さっきのお母さんの態度は…ツライよな。いつもそうなのか？」

「あ、はい…。っていうか小さいころからずっとです…。」

ここでも彼は薄笑いを浮かべています。

悲しくはないのかな。悲しさや寂しさというのは、まず愛情があって、それが薄れたりなくなったりすると起こるものなのかもしれない。だとしたら、物ごころが芽生える前から冷たくされてきた彼は、悲しみを感しない人間ということか…。でもそんなことってあるんだろうか…。私はいろいろ想像を膨らませました。

それを知ってホッとしました

しばらく経って、指導方針の確認のため、お母さんと直接電話で話す機会がありました。お母さんは、いつもお世話になっておりますと丁寧に話されました。

「ウチのようなバカ息子に、毎日補習して下さって感謝しています。家ではさっぱりやらないんで…。高校に受かるかどうかはともかく、今一生懸命勉強をやっていることは将来のためになると思います。」

私はこの言葉を聞き、愛情がないだの考えた自分がいかにばかげていたかを悟りました。

でも、どうして子どもに冷たい態度を取るのでしょうか。突き放すことによって子どもが奮奮するのを期待しているのでしょうか。だとしたら逆効果です。

自信が一番

少なくとも先ほどの生徒の場合、「悔しいので見返してやります！」とは考えていません。「自分は親に見放されている」とあきらめています。批判・否定型の親の子どももそうでした。反発しない、自分に自信が持てないという点で一致します。

子どもに自信をつけさせてください。そのためには批判めいたことは言わず、見放さず、子どもに関心を寄せ、長所をほめてください。勉強に限らない、子育ての基本であると思います。

愛情のウラ？

「愛情の裏返し」という言葉があります。ネガティブなことを言う人も、投げやりになる人も、子への愛情が根本にあって、行動はその裏返しになっているだけなんですよね。

でも、今後はどうか愛情を裏返さないようにしてください。「あんたはバカね」なんて言葉は、ちょっかいをかけるとき以外は決して使わないで下さい。

子どもには愛情をストレートに表現した方がいいです。その方が伸びます。自信を持って歩むことのできる人間に成長します。

あとがき

成績は上がりますが・・・

塾に入ってきた生徒の成績を短期間で上げることは可能です。私たちは一応プロですから、テクニックを使って徹底的に叩き込めば誰でもほぼそうなります。データでは新規入会生徒の95%以上が即上がっています。

しかし、**上がった先に、必ず「壁」が存在します。** すぐろくのゴール付近にある「このマスで必ず止まってください」というアレみたいなものです。

「ゴール」が「志望校」だとすると、「必ず止まれマス」は学力の「壁」です。すぐろくでは、そのマスで1,3,5が出れば進むことができ、2,4,6ならストップなどとなりますが、勉強では何が条件となるでしょう？

私はこれまでの指導経験で、ひとつはつきりと言えることがあります。

やればできる！自分の力はまだこんなもんじゃない！と、前向きに考えている人は強い
ず。 限界を突破する力を持っています。反対に、**自分には無理だ、自分はバカだから分**
らないと考える人はそこまでです。 壁につき当たったとき、それを打ち破るのにとっても苦
勞します。何度サイコロを振っても2,4,6しか出ません。

自分に自信のある子ども、自分に自信のない子どもというのは、親の関わり方によって大部分が決まります。ほめて、認めて、励ますと自信が生まれます。逆に批判、否定、無関心は自信を失くします。

勉強の目的って？

「勉強は何のためにするのですか？」とたびたび聞かれますが、私はそれには、いつも「成功体験を積むためだよ」と答えています。

将来、社会に出れば、仕事などで苦しい状況に置かれたり、目の前に大きな壁が立ちふさがったりすることがあるでしょう。そのとき、過去の成功体験が必ず役に立ちます。成功体験が多い人は「あのとき、自分がんばって工夫して見事壁を乗り越えた。今回もできるはずだ。」と考えることができるようになります。これは非常に大きな武器です。

子どもに自信に自身を持たせましょう。別紙、「第三部 子どもを動かす9つの方法」もあわせてお読みいただければ幸いです。